

< 国際会議報告 >

The 10-th International Conference “Nuclear Power Safety and Nuclear Education”
に参加して

京都大学大学院 エネルギー科学研究科 エネルギー基礎科学専攻
修士課程 2 回生 川口真一

隣国ロシアの首都、モスクワから僅か 101 km ばかり南西に行った所に、オブニンスクという都市がある。ここは 1950 年代に造られた新しい街であり、紹介文によれば「1954 年に世界初の原子力発電所の運転が開始された」という。世界初の原子力発電所は米国の EBR1 だと思われているが、ロシアの基準では、出力が 100 kW に過ぎない EBR1 は発電所として認められないのであろう。なにしろ、オブニンスクの発電所の出力は 500 kW もあったのだから。このことから分かるように、オブニンスクは原子力の街である。市章からして、原子核のまわりを電子が飛んでいる様子をイメージしたものが採用されている。ただし、ここで電子が粒子として描かれているのはいただけない。原子力の街なのだから、当然、原子力単科大学もある。その Obninsk State Technical University for Nuclear Power Engineering において、2007 年 10 月上旬、The 10-th International Conference “Nuclear Power Safety and Nuclear Education” が開催された。これは隔年開催であるので、なかなか歴史のある会議である。

会議は 6 つのセッションから成り、私は “Fundamentals of NPP safety” に参加した。しかし、私の発表内容は新しい未臨界度測定法の開発であり、“NPP safety” とは少し違うのではないかと危惧された。そこで事前に committee の方に問い合わせたところ「ADS や未臨界度測定の話も主旨に合致するので安んぜよ」との回答をいただいた。そうしたわけで、私は単身、生まれて初めての海外発表に挑んだわけであるが、実際に ADS や未臨界度の話をしたのは私だけであった。簡潔に感想を述べれば、ロシアは良い土地であるが、この会議にまた参加したいとは思わない。

まず、良かったことを挙げよう。と、思ったのだが、残念ながら、特に良かったことが思いあたらない。現地の方々から暖かいもてなしを受けたとか、のどかな農村では牛や鶏が冊すらない場所で放牧されていたとか、現地の同年代の学生に街を案内してもらったとか、モスクワの大渋滞のせいで 100 km の道程において最高速度 200 km/h を記録しながらも結局 5 時間かかったとか、ホテルで呼んでもらったタクシーが多分白タクだったとか、行きの成田発モスクワ行きアエロフロートのフライトが 5 時間 30 分遅れたとか、帰

りも滑走路混雑のため管制からの離陸許可がおりずに搭乗から離陸まで 2 時間かかったとか、ロシアという土地自体には甚だ好印象を持ったのだけれども、そのようなことは、我々科学者 (および、その雛) にとって重要なことではない。会議は英語およびロシア語で行われることになっていた。しかしながら私が参加したセッションでは、ロシア圏の人は皆、ロシア語のスライドを用いてロシア語で発表していた。通訳はついてくれるのだが、私は断片的にしか理解できなかった。同じセッションに参加していた JAEA の某氏がもの凄い勢いでメモを取っていたことから考えて、よく理解できなかったのは私の訓練不足が原因であろう。

会議の閉会后、先方のご厚意により、現地の学部学生対象の英語の授業 2 コマに参加させていただいた。大雑把に言って、初級コースと上級コースである。授業は教員 1 名に対して学生は、私を除いて初級は 5 名、上級は 9 名であった。教科書は大学オリジナルであり、主として原子炉物理に関する内容の文章を題材としている。例えば、「現在の発電用原子炉は主に軽水炉、重水炉、高温ガス炉に分類され云々」といった文章を用いて英語を学んでいるわけである。上級では、教科書に入る前に簡単な議論も行われた。テーマは「原子力を学ぶ上で、なぜ、英語を習得する必要があるのか？」であった。いくつか意見は出たが、さすがロシアは大国であると思ったのは、「海外の優れた研究と成果を共有するため」というような意見がロシア人学生からは出なかったことである。年配のロシア人研究者の重鎮に英語を話さない人が少なくないことからわかるように、彼らにとって、少なくとも冷戦下の時代には、学問をする上で英語は必要な技能ではなかったのである。

今回の会議に参加して、それほど多くの収穫を得ることができなかったのは私の反省すべきことである。しかしながら、世界の多数の人は「きれいではない」英語を話すという事実、しかしそれを理解せねばならないという現実、一方で自分は「きれい」な英語を話さなければよく理解してもらえないということ、それらを痛感した。